

間テキスト性

—— その展開と関連性について ——

岩 本 一

1 はじめに

ジュリア・クリステヴァは、「間テキスト性」の概念をミハイル・バフチン、ソシュールそしてフロイトの理論を土台として発想した。つまり、クリステヴァは、バフチンの対話性、多声性、カーニヴァル論などの研究をする過程から「間テキスト性」を発想したものと考えられる。バフチンは「間テキスト性」という表現は使っていないが、「対話」、「対話主義」そして「多声性」などの理念のなかに「間テキスト性」と同じ概念を用いている。つまり、バフチンは「一つのテキストは「自己」と呼ばれる単一的な主体によって生み出されるものではなく、数知れぬ「他者」たちとの対話（交通）によって編み上げるものである」、と述べている。

また、トドロフ（1981）の中にもクリステヴァの「間テキスト性」の定義と共通したバフチンの一節がある。

後の著作のなかで、バフチンはまだ1つの明証的事実にとりわけ固執することになるだろう。それは、たとえいかなるものであれ、言語（パロール）の対象となるものは、何らかの形で、常に既言のものであること、つまり、そうした対象について述べられた以前の諸言説に遭遇しないでいることなど不可能であるという事実である。（P98）

下線の部分で述べてるように、言説は、その対象へと向かうすべての途上で、他なる者の言説と出合い、その言説と、強烈で生き生きとした関係を取り結ばずにはいられないのである。⁽¹⁾

次に、クリステヴァは、「間テキスト性」の発想をソシュールの晩年の研

究である「アナグラム分析」の中に共通理念を見いだした。つまり、ソーシャルは、ラテン語で書かれたサトゥルヌス詩やヴェーダ詩などの中で表層に現れている詩文の背後にテーマ語（ほとんど固有名詞）が隠されているのではないかと考えた。この考え方は次の点で「間テキスト性」の理念と通底する。

(1) テキスト生成は詩人（作者）の個的、独創的なインスピレーションによるものではなく、すべては詩人（作者）以前に既に存在する無意識的な法則によってなされる。もしそうであるならば、すべては既に言われ、書かれてしまっている。さらに、(2) テキストに表出する単語が詩人（作者）の独自の意識の働きにより直接に選ばれたものではないとするなら、テキストに対して従来特権的なステータスを維持してきた「作者」ないしは「主体」の存在は危ういものとなる。⁽²⁾

アナグラム分析から間テキスト性に至るには、表層テキストのなかに散種されているテーマ語という考え方をテキストの次元にまで拡大適用すれば、「語の下に潜む語」というアナグラム分析が、「テキストの下に潜むテキスト」という理念で「間テキスト性」の理念に相通じるのである。

それから、クリステヴァは、「間テキスト性」の理論を構築する上で、フロイトの夢作業、つまり、「圧縮」と「置換」の理論に注目した。

圧縮とは、「無意識的過程の機能の本質的様相の一つ。ただ一つの表象がそれだけで数多くの連想の連鎖を代表し、その表象はそれらの接合点をなす。」⁽³⁾ ことである。「間テキスト性」の概念は「表象」という表現を「シニフィアン」や「テキスト」の用語で置き換えてみると、間テキスト的な作用とは「ただ一つのシニフィアン＝テキスト（の連鎖）がそれだけで数多くの連想を代表し、そのシニフィアン＝テキスト（の連鎖）はそれらの接合点をなす。」ことである。つまり、シニフィアンやテキストも、複数の言葉やテキストを織り上げる連鎖的な接合点である、と考えられ、クリステヴァの「間テキスト性」と相通じるところがある。

「置換」とは、「ある表象のアクセントや関心や態度が、その表象を離れ、別の表象へ移ることができるという事実さす。」⁽⁴⁾ ことである。これを圧縮と同様に表象をシニフィアンやテキストに置き換えてみると、「間テキスト的な作用とは、あるシニフィアン＝テキストのアクセントや関心や態度が、そのシニフィアン＝テキストを離れ、別のシニフィアン＝テキストへ移ることができる。」ということである。つまり、「置換」作用は何らかの要素の移動や転移（位）に関わり、それが引用的な作用としての「間テキスト性」の概念に通じるものがある。

以上、三人の思想家の理論を概観し、間テキスト性の理念と通底することを明らかにした。

最後に、クリステヴァの概念規定を述べる。

クリステヴァは「セメイオチケ I」（1983）のなかで、間テキスト性を次のように定義している。

……あらゆるテキストは引用のモザイクとして構築されている。テキストはすべて、もう一つの別なテキストを吸収・変形したものである。（P 61）

つまり、一つのテキストが、他のテキスト群とは無関係に、完全なオリジナルとして書かれることはありえない。換言するなら、テキストは、「これまで決して例のなかった、そして今後も決して模倣する人がないような仕事から生成されることは絶対にありえない。」ということだ。⁽⁵⁾

さて、この稿では間テキスト性の展開とその関連性について述べる。

2 「間テキスト性」の展開

クリステヴァは、間テキスト理論の定義づけを行なった後、この概念に関する理論的な書を書いていない。彼女のその定義は単一のテキスト a と単一のテキスト b という概念モデルが前提であった。しかし、バフチンの対話や多声性、さらに、ソシュールのアナグラム理論やフロイトの圧縮や置換の概

念を考慮すると、「間テキスト性」の概念をテキストa対テキストbという二項対立の枠内に制限してしまうのは無理がある。そこで、ジェラルド・ジュネットは、「アルシテキスト（邦訳）1986年」の中で「間テキスト性」の概念を発展させ、次のように定義した。

しかし、「さしあたって」テキストがわたしの関心を引く（引かない）のは、ひとえにそのテキスト的な超越性、つまりは、明白な形であり、ひそかな形であれ、テキストを他の複数テキストと関係させるすべてのものによるのです。私はそれを「超テキスト性」と呼び、……（P87）

このように、ジュネットは、「間テキスト性」の概念を一段上に位置する「超テキスト性」なる概念を提唱し、クリステヴァのテキストa対テキストbという二項関係を他の複数テキストとの関係に発展させ、クリステヴァの定義を包括し、「間テキスト性」の概念に動態的な面が付加されることになった。しかし、ジュネットの「間テキスト性」の概念はテキストの相互外的な関係のみを想定し、テキスト自体の内部でたち働くテキストの相互内的な関係——テキストa対テキストa'、a''⁽⁶⁾……——を見過している。ジュネットの「間テキスト性」の概念の欠陥を是正し、さらに発展させたのはリュシアン・デーレンバックである。デーレンバックは「間テキスト性」を次のように三つのタイプに規定した⁽⁷⁾。

(1) 一般的な「間テキスト性」

クリステヴァの定義した「間テキスト性」である。つまり、作者Aのテキストa対作者Bのテキストbの関係に相当する。

(2) 制限的な「間テキスト性」

ジュネットの定義した「間テキスト性」である。つまり、同一の作者Aによるテキストa対テキストbの関係に相当する。

(3) 自己内部的な「間テキスト性」／自己的な「間テキスト性」

デーレンバックの定義した「間テキスト性」である。つまり、同一の作者Aによるテキストa対テキストa（a'、a''……）の関係に

相当する。

以上、三つのタイプの分類によって完全な「間テキスト性」の理念定義が提示される。

次に、デーレンバックの提唱した(3)の自己内部的／自己的な「間テキスト性」の発展関係理論として、ロラン・バルト、ジョナサン・カラー、バーバラ・ジョンソンそしてクリステヴァの見解をみてみよう。まずクリステヴァの師であるロラン・バルトは彼女の影響で「間テキスト性」についての見解を、「作者の死」(1979年)のなかで次のように述べている。

われわれは今や知っているが、テキストとは、一列に並んだ語から成り立ち、唯一のいわば神学的な意味（つまり、「作者＝神」の〈メッセージ〉ということになる）を出現させるものではない。テキストとは、多次元の空間であって、そこではさまざまなエクリチュールが結びつき、異議をとねえあい、そのどれもが起源となることはない。テキストとは、無数にある文化の中心からやって来た引用の織物である。(PP85～86)

このように、すべてのテキストが引用で織り成される織物でしかないとするなら、作者とはテキスト生成のほんのわずかな部分を担うだけの存在にすぎないと考えるべきである。もはや、ロマン派流の美学のごとく、文学作品は、個人的な詩的靈感とか、天才作家の独創性・唯一性とか、個人の唯一絶対の単独性・固有性とかいうものを啓示しないことになる。つまり、「作者の死」を啓示している。⁽⁸⁾

さらに、バルトは「邦訳S／Zーバルザック（サラジーン）の構造分析」(1973年)のなかでも「主体」ないし「無垢なる起源」の消失、不在を問題にしている。

……「私」(je)とは、テキストに先立って存在する無垢な主体ではない(……)テキストに寄りつくこの自己(moi)自体が、既に他の複数のテキスト、複数無限の――より正確に言うなら、失われた（その起源は失わ

れている)——コードなのである。(P16)

このように、バルトは起源となる無垢なる主体など存在しない、という。テキストが引用の織物であるからといって、その引用のもと(＝起源)をいくら追求しても引用のもともまた引用である、という無限後退の過程に陥るだけである。⁽⁹⁾

次に、ジョナサン・カラーの「間テキスト性」を1976年の論文(Presupposition and Intertextuality)の一節から引用してみよう。

間テキスト性とは、ある作品がそれに先立つ複数の特定なテキストと取り結ぶ関係を表わす呼称というよりも、作品はある言説空間に参画しているということ、そして、作品がそうした空間を潜在的に形式化する諸コードと関係を有するというものを提言することである……(P1382)

このように、カラーは、「間テキスト性」の問題を影響関係論的な見解から切り離し、「間テキスト性の研究は、源泉や影響を調べることではない」、⁽¹⁰⁾という理念を示した。

また、バーバラ・ジョンソンも(邦訳「差異の世界」1987年)のなかで「間テキスト性」について論考している一節を上げている。

「間テキスト性」とは、テキストが自己充足しないまま、他者性に横断されているさまざまなありようを示す。(P116)

さらに

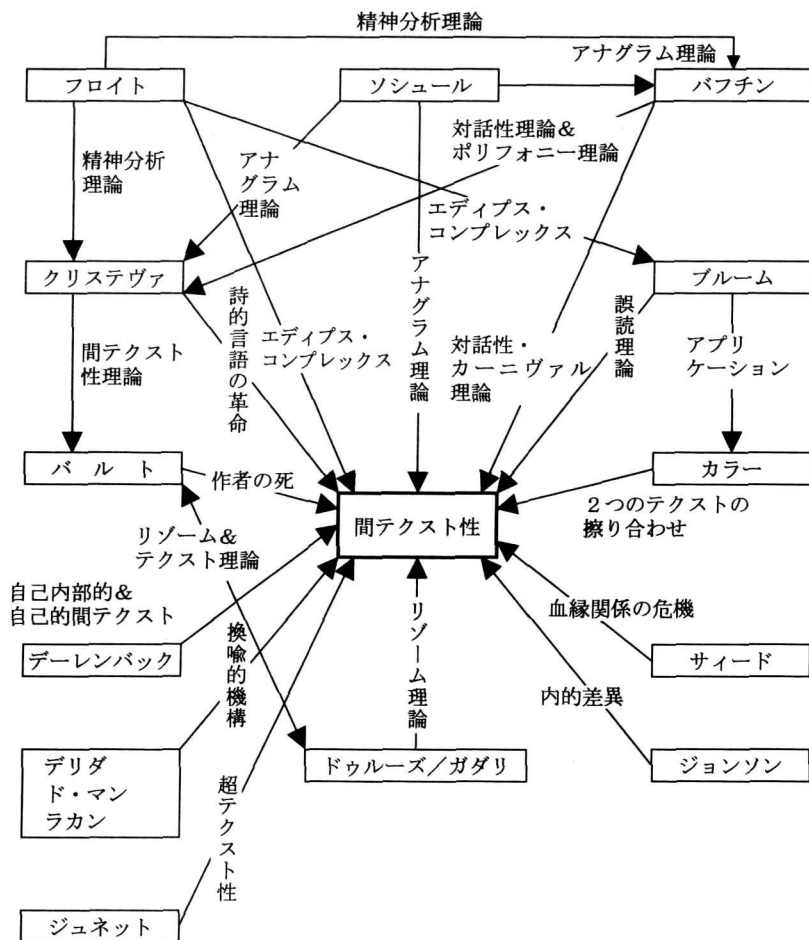
……マラルメは間テキスト性を、複数テキスト間の関係として作動化させるのではなく、それをテキスト内の隔たりや間断の戯れとして作動化させる。(P121)

このように、ジョンソンは、「間テキスト性」を複数の異なるテキスト間の関係だけにとどまらず、テキストのテキスト自身に対する関係をも取り込む概念が必要である、という。

最後に、クリステヴァは、テキスト生成批評のなかで、「間テキスト性」とは、欲望を推進力とする無限の意味生成の過程とみなされたジェノ・テキスト（生成としてのテキスト）に位置づけられる。そしてその〈痕跡〉として読みとられる完結し、閉ざされた言語体系であるフェノ・テキスト（現象としてのテキスト）において引用のモザイクとして実現される、という。つまり、先行テキストとの関係（フェノ・テキスト——(1)の一般的な間テキスト性）のみならず、同一テキスト内の関係（ジェノ・テキスト——(3)の自己内部的な間テキスト性）をも重要な分析対象とみなしている。⁽¹¹⁾

3 間テキスト性との関連性

3. 1 「間テキスト性」理論相関図



→ 影響関係

↔ 相互関係

この相関図に従って、思想家のキー・ワードと「間テキスト性」との関連性について述べる。

3. 2 間読み、影響、エディプス・コンプレックス、誤読

ハロルド・ブルームは、間読み（インター・リーディング）、影響（反・影響）、エディプス・コンプレックス、そして誤読（理論）などのキー・ワードが「間テキスト性」と深く通底している、という。順を追って論考する。

a 間読み（性）

間読みとは、もし私たちが、テキストは複数無限のテキスト（間テキスト）から織り成される引用の織物であるとするならば、そのテキストの書き手もそのテキストの読み手も、複数無限の書き方・読み手（他者）たちの存在に横断されたテキストのようなものだ、と考えられる。⁽¹²⁾ つまり、ブルームの「詩と抑圧」（1976年）のなかで、間読みを次のように述べている。

どんな詩であっても、それは1つのインター・ポエムであり、詩を読むいかなる読みも、それは一つの間読み（インター・リーディング）である。（PP 2～3）

ブルームは、「間テキスト性」とは「読む」こと、つまり、「間読み性」と述べている。それは、またカラーの言う、「エネルギーを解き放つために、二つのテキストを擦り合わせること」、⁽¹³⁾ と相通じる。

b 影響（反・影響）

「影響」という考え方のもとにあるのは、誰か（何か）が別の誰か（何か）に決定的な力を及ぼすということである。しかし、ブルームが1975年に刊行した「影響の不安」のなかで述べられている「影響」とは次のようである。

私の考えている影響とは、存在するのはテキストではなく、テキストの間の関係だけである、という意味である。（P 3）

さらに、ブルームは、影響が、時間的に先行する者（物）と、その後に従う者（物）に力を及ぼすという過程をいうのではなく、先行するテキストと後

続するテキストとの時間的な順序を無化し、両者を同じ時間平面上に並べ置く、という思考法を提起する。

また、ブルームは、「影響」をクロノロジカルな時間的順序と秩序を位階的・権力的なものとして受け止めながら、それらを脱構築した。つまり彼は、従来の「影響」の考え方を180度転換して、その「影響」理論に反対の反-影響理論を提唱したのである。⁽¹⁴⁾

c エディプス・コンプレックス

ブルームは、従来型の先人たちの一方的な影響関係に、フロイトが提唱したエディプス・コンプレックスにおける父親と子供との関係を重ね合わせ、それらの影響を脱構築する。つまり、ブルームは、コンプレック機制に示される父(権力、掟=法)と子のライバル関係に、先行する詩人と遅れてきた詩人との優劣関係を重ね合わせ、この優劣関係を無化させるか転覆させる読みが必要である、⁽¹⁵⁾ という。

d 誤読(反読)

ブルームの読み(間テキスト性)の理論とは、ある詩人の卵が先行詩人を押しのけてみずからの想像力のためのスペースを確保する、そのときの創造的な訂正行為のことである。つまり、先行する詩人たちの影響に脅ながらも、遅れてきた詩人たちがこの影響力に挑戦し、先行詩人たち(先行テキスト)を誤読(反読)することで、それらの現前性を無化しようとするエクリチュール実践である。すなわち、反定立的批評のことである。

3. 3 詩的言語の革命

クリステヴァによると、詩的言語の革命とは、言語の秩序的状態(象徴界)のなかに、欲動の未定形な力を噴出させ、言語秩序の壊乱・転覆をはこることである。つまり、言語秩序の番人を「父」として捉え、詩的言語の革命を母

(女性)的力による父(男性)的権力からの解放として捉えていることである。これは、ブルームの誤読理論――先行者たる父の権威を奪い、あわよくば死を言い渡すこと、つまり、エディプス・コンプレックスの禁を解くこと――に通じる。それは、また間テキスト性の詩学とフロイトのエディプス・コンプレックス、さらに、ブルームの誤読理論に通底するものである。⁽¹⁶⁾

さらに、「影響」(ブルーム的な理論でない)の概念を父とし、間テキスト性のそれを母と結びつける間テキスト性の理論と母―女性的なものとの関連性について、クレイトン／ロススチーンのコメントを引用してみる。

(リン・)ケラーは、(メアリアン・)ムアーが影響という偉大で古びた父親的な線分である影響と、ジェンダーに囚われない、よりオープンで平等な流れである間テキスト性との間の葛藤をフェミニスト的に演出している点を強調していた。(P30)

3. 4 反復、リゾーム、接合、間、循環⁽¹⁷⁾

ドゥルーズ／ガタリは、反復、リゾーム、接合、間、循環などのキー・ワードを通して間テキスト性と深く相通じることを指摘している。

a 反復

「反復」とは、本来、先に為したこと、生じたことが、時間的な隔たりをおいて繰り返されたり、生じたりすることである。しかし、ドゥルーズにとって、「反復」とは、先行するもの(こと)が後にくるもの(こと)を繰り返すという意味である。これは、優位に立つのが後にくるもの(こと)であるという逆転の考えである。ドゥルーズの「反復」の概念は、後続者が先行者に「影響」を及ぼすとするブルームの誤読に対する考え方に相同している。

b リゾーム

リゾームとは、G・ドゥルーズ／F・ガタリの「千のプラトー」（1980年）の序に書かれた論考であり、そして、書物についての考察である。

ドゥルーズは、位階的、二枝分岐的な樹木のイメージを、いかなる要素とも接続可能な「リゾーム」のイメージと対置させ、書物の宗教であるキリスト教批判を行う。つまり、昔、書きものは、ぶな木の樹皮に書かれたことをイメージし、西洋のあらゆる系譜的、樹木的な思考の起点とも言うべきキリスト教神学へと批判をさし向けたのである。ドゥルーズの樹木—書物批判は、系譜、血縁といった縦軸方向のつながりを特権視してきたキリスト教的な文化に向けられたのである。なぜなら、キリスト教文化では「神」は自らに似せて被造物を創造し、家族は世代から世代へと樹木状に「父」の形質を伝えていく、まさに類似性に支えられた不変的、かつ普遍的な系譜学の体系にほかならないからである。ドゥルーズのリゾーム理論はあくまでも換喩的な特性を示唆している。

次にドゥルーズのリゾーム理論と近似的な特徴である非意味的切断の原理にふれてみよう。

4° 非意味的切断の原理。これは諸構造を分割したり、一つの構造を横断する、あまりに意味を持ちすぎる切断に対抗するものだ。リゾームは任意の一点で切れたり折れたりしてもかまわない。それ自身のしかじかの線や別の線に従ってまた育ってくるのだ（「千のプラトー」、豊崎光一他訳河出書房新社、（P16）、1994年）

ドゥルーズは、シニフィアン的な見解で非意味的切断の原理を考察している。つまり、彼のシニフィアンは、反シニフィエ、反意味として読まれており、リゾームの換喩的特性とも相通じるものである。

また、非意味的切断の原理は、「主体化」とも緊密な関連がある。なぜなら、意味を与えることは、「意図」という言葉のもとに、統一的、単一的と想定される主体の内面に完全に委ねられてしまうからである。リゾームは、

主体の非単一的な性質と主体という概念の危うさそのものを強調している。

最後に、ドゥルーズは、歴史学的な思考プロセスを否定する。なぜなら、歴史学は性質上、ことの起源を画定し、過去から現在へと樹木的、位階的、単線的に時間秩序を仙るが、いかなる点とも自由に接続可能なりゾーム的な逃走線とは一致し難いからである。「リゾーム」のなかで、ドゥルーズは歴史（学）について次のように述べている。

人々は歴史を書く。だが、常にそれを定住民族の視点から、そして国家という統一的装置の名において書いてきた。たとえ遊牧民を語る時でも、やはりこの装置が働くのだ。欠けているのは歴史に対立するものとしてのノマドロジーなのである。（「千のプラトー」 P34）

では、「リゾーム」と「間テキスト性」とを水平的に関係づけているキー・ワードを考察していく。

c 接合

接合と異種混交性の原理は、複数の要素を系譜的、位階的に結びつけようとする隠喩的な思考体系を打破し、異質なもののどうしをすべて同一の平面上に並べて置くような換喩的な思考の可能性を打ち出している。ドゥルーズは、「本というものの理想は、すべてのものを（……）たった一枚の頁の上、同じ一つの平面の上に広げることである」、という。

さらに、ドゥルーズは、「樹木には常に何かしら系譜的であって、これは決して民衆的な方法とは言えない」と明言している。この民衆的なという言葉は、バフチンの対話性が、カーニヴァルの、異種混交的な舞台であった民衆文化の世界だったことを物語っている。したがって、その世界では、権力的な中心を持たない種々様々な人々が階層・秩序＝掟をこえて自由に行き交いするのである。ここに、「接合」や「異種混交性」と「間テキスト性」の相同性が見られる。

d 間

ドゥルーズがタイトルに使ったプラトーというタームを、「一つのリゾームを作り拡張しようとして、表層的な地下茎によって他の多様と連結しようような多様体」であると規定している。つまり、リゾームとプラトーの関係は一つのテキストと複数の間テキストとの間に設定した関係と相通じるところがある。プラトーとは、間テキストと同様、常にリゾーム＝テキストの間——真ん中——にあってリゾームを形成し、他の複数のプラトーをリゾームのうちにおいて自由に結び合わせるものである。ドゥルーズでは「千のプラトー」の中で「間」について次のように述べている。

ものの間とは、相互に一つのものからもう一つのものへと至る位置決定可能な関係を指し示すのではない。(……)それは始まりも終わりもなく、両岸を侵食し、真ん中で速度を増す流れなのだ。(P37)

テキストは統一的な中心を持った自己完結体ではなく、他の様々な場所からやって来た複数の(間)テキスト群からなる織物である、という間テキスト性の考え方と、リゾームは統一性から成っているのではなく、様々な次元から成っている、というドゥルーズの見解と結びつくであろう。

e 循環

循環というタームも、間テキスト性とリゾームを接続するキー・ワードとして機能している。ドゥルーズはリゾームを論じるテキストのなかで、この循環に類した言葉を頻繁に使っている。この循環は、二分法的なものに対立したり、リゾームによる「脱領土化」を推めるのにも使われる。

さらに、バルトのエクリチュール同様、ドゥルーズのリゾームも「循環」によって定義づけられるのである。次のように「千のプラトー」のなかで述べられている。

リゾームは位階的でなく、意味形成的でない非中心化されたシステム、

「将軍」も組織化する記憶や中心的自動装置もなく、ただ諸状態の循環によって定義されるシステムなのである。(P32)

3. 5 換喩的機構⁽¹⁸⁾

S・A・ハンデルマンは、「誰がモーゼを殺したか」のなかで、ギリシャ・キリスト教的な発想対ラビ＝ユダヤ的な発想を隠喩的な発想対換喩的な発想として捉え直している。

ギリシャ・キリスト教的な発想では、隠喩というものは単語、つまり名前に起こるものであって、それは、ひとつの単語もしくは観念が別の単語、名前、観念に移行される類似の関係に依存する。ここでの類似は代置、選択、同一化へとずれ込んでいき、この移行の底面にある差原点は消去される(……)ラビの発想では、ことばと物との関係は、まずは代置の関係ではない。むしろ、ラビ的(つまり命題的)解釈の論理――それに精神分析学――の根底にある関係項目は、隣接、並置、そして関連である。ここでは、類似は差異をけって消去せず、(あたかも……である)はけって(……である)にはならず、文字どおりのものはけって無効にされない。(PP108～9)

このように、隠喩的な機構と換喩的な機構を対立してみると、前者は位階的、権力的、求心的、トゥリーの性質のものであるのに対し、後者は、脱位階的、遠心的、リゾーム的な性質のものである。間テキスト性が選択的に排除するのではなく、すべてのものを水平的に並置し、自由に関連づけることである。したがって、間テキスト性は換喩的なイメージと交差・交通することである。

次に、ラビ＝ユダヤ的な発想が、「差異」すなわち「他者性」を消去しないこと、意味を一義性に向けて収斂させないこと、意味作用を常に開かれたものとして意識することなどを示唆している。これは、まぎれもなく間テキスト性の特徴であり、デリダ、ラカン、ドゥルーズ、ブルーム、ド・マンと

いったポスト構造主義者たちの共通した思考のあり方である。また彼らは、ラビ的、間テキスト的思想家・理論家であると言えるだろう。

最後に、ハンデルマンは、バルトが「テキスト」と「作品」を区別する7つの特徴のなかに、ラビ＝ユダヤ的発想と間テキスト性の理論をつなぐ要素を読み取っている。それを引用してみる。

- (1) 作品と対立するものとしてのテキストは明確にされた対象ではなくて、言説の中に存在し、活動、生産の中においてのみ体験できる方法論的領域である。
- (2) テキストは従来の階層的ジャンル分類を打ちこわすものであり、逆説的である。
- (3) テキストは、記号内容との関係ではなく、記号との関係で体験される。それは記号内容を無限に遅延させる。それは根源的に象徴的なものであって、閉じることがない。テキストの行なう記号表現の遊戯は変化の過程ではなくて、換喩的転置の連鎖的な動きである。
- (4) テキストは複数ので、他のテキストと交わり、これを単一、独立のものとすることはできない。
- (5) テキストは父親の署名なしに読まれる。
- (6) 作品は消費される対象である。テキストは読む行為と書く行為の区別を廃棄する。読む行為はテキストと遊ぶことであり、テキストは読者の共働を要求する。
- (7) テキストはそれ自体の（社会的）ユートピアであり、快楽の領域である。（前掲書、PP155～6）

第一項、二項は、「テキスト」と「作品」の対立ではなく、ドゥルーズの言う「リゾーム」と「樹木（根）」の関係と相同視される。第三項は換喩的であり、第四項、五項は「間テキスト性」の理念を示唆している。

4 おわりに

ジュリア・クリステヴァが1967年四月の「クリティック」誌において「間テキスト性」の定義――「…あらゆるテキストは引用のモザイクとして構築されている。テキストはすべて、もう一つの別なテキストを吸収、変形したものである。」――と発表してから、ありとあらゆる議論の出発点となった。この時期は思想的な変動期であり、構造主義・記号論の運動が「ポスト構造主義」に移行しつつある時期であった。つまり、「主体性」が「他者」とか「他者性」といった問題などが批評の主流となった。それはまた、隠喩的思考から換喩的思考へのアクセントの転換であった。この換喩的とは位階的・権力的な中心をどこにも設定しない水平的な知の発想形式である。これは、ドゥルーズ／ガタリの唱えたリゾーム理論に通底するものである。さらに、換喩的な機構は、デリダ、ラカン、ドゥルーズ／ガタリ、ブルーム、ド・マン、バルトたちに共通して観察される思考を包含している。また、「間テキスト性」はアルチュセールのようなマルクス批評にもテキストを読む際に重要な問題を提起するのである。最後に、「間テキスト性」は絵画や写真などのイメージ作品の問題にも有効に接続する。つまり間テキスト性の特徴である先行するテキストと後続するテキストとの時間的な順序を無化し、両者を同じ時間平面上に並び置くという思考法によって、国も時代もまったく異なり、何の因果性もない二つの画像・映像作品が我々の内部において結ばれるのである。この出会いは絵画・映画・映像的テキストと文学テキストとの間にも出現する可能性もある。⁽¹⁹⁾ このように、今後、ますます「間テキスト性」の理念はあらゆる分野の問題にも有効に接続されることが確認されるだろう。

注

1 土田知則、「間テキスト性の戦略」夏目書房、2000年、P 22

2 Ibid ; P 28

- 3 ラブランシュ／ポンタリス、村上仁編、「精神分析用語辞典」みすず書房、1984年、P 3
- 4 Ibid ; P34
- 5 土田知則他著、「現代文学理論」P 169
- 6 Ibid ; p43
- 7 Ibid ; p44
- 8 Ibid ; P 47
- 9 Ibid ; PP48～49
- 10 ロマン・バルト、沢崎浩平訳、「S／Zーバルザック「サラジーン」の構造分析」みすず書房、1973年、P 1383
- 11 土田知則他著、「現代文学理論」新曜社、1997年、PP149～150
- 12 土田知則、前掲書、P 74
- 13 カラー、「Presupposition and Intertextuality」、MLN、1976、Vol.91／No. 6、P. 1382
- 14 土田知則、前掲書、P 83
- 15 Ibid ; PP88～89
- 16 Ibid : P 94
- 17 Ibid ; PP101～103、PP202～220
- 18 Ibid ; PP187～190
- 19 Ibid ; PP239～241

参考文献

- 1 土田知則、「間テキスト性の戦略」夏目書房、2000年
- 2 加藤文彦、「相互テキスト性の諸相」国書刊行会、2000年
- 3 西川直子、「クリステヴァ」講談社、1999年
- 4 土田知則他著、「現代文学理論」新曜社、1997年
- 5 川口喬一／岡本靖正編、「最新文学批評用語辞典」研究社、1998年

- 6 北岡誠司、「パフチン——対話とカーニヴァル」講談社、1998年
- 7 丸山圭三郎編、「ソシュール小事典」大修館、1988年
- 8 ラブランシュ／ポンタリス、村上仁編、「精神分析用語辞典」みすず書
房、1984年
- 9 ジェラルド・ジュネット、和泉涼一訳、「アルシテクスト序説」書肆風
の薔薇、1986年
- 10 ロマン・バルト、花輪光訳、「言語のめざめ」みすず書房、1987年
- 11 ロマン・バルト、花輪光訳、「作者の死」、「物語の構造分析」みすず書
房、1979年
- 12 バーバラ・ジョンソン、「差異の世界」紀伊国屋書店、1990年
- 13 ジル・ドゥルーズ、財津理訳、「差異と反復」河出書房新社、1968年
- 14 クリストファー・ノリス、荒木正純他訳、「ディコンストラクション」
勁草書房、1985年
- 15 E・W・サイード、山形和美他訳、「始まりの現象——意図と方法」法
政大学出版局、1992年
- 16 S・A・ハンデルマン、山形和美訳、「誰がモーゼを殺したか」法政大学
出版局、1987年
- 17 G・ドゥルーズ／F・ガタリ、豊崎光一他訳、「千のプラトー」河出書房
新社、1994年
- 18 J・デリダ、高橋允昭訳、「ポジション」、青土社、1981年
- 19 ジュリア・クリステヴァ、原田邦夫訳、「記号の解体学——セメイオチ
ケ I」、せりか書房、1989年
- 20 ジュリア・クリステヴァ、原田邦夫訳、「詩的言語の革命 I」、勁草書房、
1991年